



日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL.03-3503-2722 <https://www.jnpc.or.jp/>



大敗

当選者の名前に花をつける石破茂首相(中央)=7月20日、自民党本部

撮影:平田 明浩(毎日新聞社写真映像報道部)

7月20日の参院選で参政党が躍進した。国政選挙の常となった日本記者クラブ主催の党首討論会を、この参院選でも2日に実施した。討論会に、参政党の神谷宗幣代表は参加した。当初、参加するはずではなかったのに加わったのは、クラブが各党党首を招くために設けた基準を、直前になって満たしたからだ。選挙結果を考えれば、参政党が参加していたよかったと思う。同時に、条件を満たさず参加していなかったら、に思いを致さなければと痛感する。胸をなでおろすだけでなく。(専務理事 江木慎吾)

「勝ちに不思議の勝ちあり。負けに不思議の負けなし」は、野村克也監督がよく引用した言葉だった。裏を返せば、人は負けた時には敗因を探るが、負けなかった時には深く考えず「結果オーライ」に陥りやすい、ともいえるのだろう。

新聞記者として選挙取材の中心にいたことはないが、何度も選挙にはかかわった。あらゆる報道がそうであるはずだが、選挙報道には間違いが許されないという緊張感がことさらつきまとった。その緊張とともに、記憶に残る言葉がある。開票が進み、次々と版が刷り上がり、編集作業も一段落したところ、「圧勝、圧勝」という言葉が編集局内で聞こえてくる。どういうわけか自分でも「圧勝、圧勝」と口にして、回ってきた紙コップにビールを注いでのどを潤したものだ。実のところ、何がどう「圧勝」なのか、さっぱりわからないのだけれど、かわった人すべての労苦が洗い流されるような気がして。

もし参加していなかったら
思いをめぐらす党首討論会

参院選 8党党首討論会



左から神谷宗幣 参政党代表、田村智子 日本共産党委員長、斎藤鉄夫 公明党代表、野田佳彦 立憲民主党代表、石破茂 自由民主党総裁、吉村洋文 日本維新の会代表、玉木雄一郎 国民民主党代表、山本太郎 れいわ新選組代表

迫った感も深掘りに課題

伊藤宏 (朝日新聞社 論説委員)

代表質問団に加わるのは初めてだった。果たして私に務まるか。緊張しながら最初の事前打ち合わせに臨むと、長年務めてきた橋本五郎委員から、アドバイスをいただいた。

「品位を保ちつつ、質問は厳しく単刀直入に」ご意見うかがいの質問はしない。大いに共感し、細部までこだわった原稿を用意した。

ところが、いざ党首らを目の前にすると、「下を向いて原稿を棒読みしたら、雰囲気にも込まれる」と思った。心の中で原稿を捨てた。

橋本委員に加え、経験豊富な佐藤千矢子委員、私と同じく初参加の奥

村茂三郎委員と4人で臨んだ。

党首らに、できるだけ多くのテーマについて聞き、バランスよく発言の機会を与えたい。一方で、それぞれの考えも深掘りしたい。難しい連立方程式を解く気分だった。

4人で連携して単刀直入に質問を繰り返すし、党首らに迫ることはできたかもしれない。例えば、奥村委員が石破茂首相に給付金を問うと、聞かれていないのに「バラマキ」という批判はあたらない」と述べた。公明党の斎藤鉄夫代表も、私が自民党候補の推薦をただと、自ら「裏金議員は推薦していない」と釈明した。

ただ、限られた時間のなかで、二の矢、三の矢を放ち、じっくり話を聞くまでは難しかった。激動する国際情勢の中、日本の戦略をどう描くか。石破首相と立憲民主党の野田佳彦代表の違いを浮かび上がらせたかったが、たどりつけなかった。

「多様なテーマ」や「バランス」と、「深掘り」をどう並び立たせるか。常に悩みながら、よりよい方法を探し続けるほかないのと思う。

(代表質問担当)



代表質問を担当した奥村茂三郎、佐藤千矢子、橋本五郎、伊藤宏の各企画委員 (左から)

目次

▼ 8党党首討論会	2 / 3
▼ 今月のクラブゲスト	5
▼ 会見レポート	5 / 8
森下洋子 松山バレエ団理事長・団長、プリマバレリーナ／池澤夏樹 小説家、詩人／秦早穂子 映画評論家／澁谷梨絵 シンパ代表取締役、小池理雄 小池精米店代表／坂東眞理子 昭和女子大学総長、初代内閣府男女共同参画局長／松本正生 埼玉大学名誉教授／茂木友三郎 日本生産性本部名誉会長、キッコーマン取締役名誉会長・取締役会議長	
▼ 日本記者クラブ 受賞記念講演会	9
▼ ワーキングプレス	10 / 13
イスラエル イラン核施設空爆	
参議院選挙、自公が過半数割れ	
日本経済新聞社 佐藤理	
「検証・フジテレビ問題」	
フジテレビジョン 井上義則	
大川原化工機冤罪事件	
毎日新聞社 遠藤浩二	
▼ 書いた話書かなかった話	14 / 15
米国の保守思想家を追って	
ミシガンの小さな村への旅	
会田弘継	
▼ リレーエッセー	16
与謝野馨さん 元官房長官、元財務相	
毎日新聞社 三沢耕平	
▼ MYBOOKMYPR	17
▼ 写真回廊	20

広さ深さ両立の解どこに 奥村茂三郎（日本経済新聞社 上級論説委員）

「ジャーナリズムは歴史の最初の草稿」という有名な言葉がある。党首討論会で初めて代表質問をするに当たって私が意識したのも「後世の歴史家がこの討論会を振り返ったときに、質問者は聞くべきことを聞いていたか」という視点だった。

参院選に先立って日本新聞協会は2つの声明を出していた。「記者等への不当な攻撃に対する声明」と「インターネットと選挙報道をめぐる声明」である。新聞やテレビが「本当の事実」なるものを報じない「オールドメディア」として攻撃され、ネットで飛び交うフェイクニュースが選挙結果に影響を与える。こうした「時代の空気」のなかでの討論会だったことは記録しておきたい。

台頭するポピュリズムや排外主義に対して記者がしっかりと批判し、爪痕を残せたのか。これが、後世の視点だろう。

そうした意味で、開催直前に国会議員を5人集めた参政党をあらかじめ決めた透明なルールに基づいて招くことができたのはフェアでかつオープンであるべき日本記者クラブの討論会にふさわしい判断だった。招待がある種の権威づけに使われたと

の指摘はあるが、外国人との共生を公開で討論できた意義は大きい。

経済政策はトランプ関税に加え「給付か、減税か」の物価高対策を聞いた。財源や政策効果、金融、市

政党の輪郭可視化の努力を 小栗泉（日本テレビ放送網 特別解説委員）

今回14人が当選して躍進した参政党の神谷宗幣代表は、選挙後取材した私に「日本記者クラブの党首討論会に出たのが大きかった。あそこから流れが変わった」と語った。

この言葉を、日本記者クラブの企画委員としてどう受け止めるべきか。

クラブの党首討論会に出るということが、政党としての信頼感、認知度を上げる一つのステータスになっている面は確かにあるだろう。

一方、神谷代表を招いたあの党首討論会で、参政党の本質を有権者に伝えることができたのだろうか。

第1部の党首同士の討論では、他の党首から神谷代表への質問は一つもなかった。第2部の企画委員による代表質問では、全員に聞いた質問を除くと、政策実現のための財源と、行き過ぎた外国人の受け入れに反対する「日本人ファースト」について

場を与える影響も追加質問でもっと追究したかった。年金や医療など生活に身近な社会保障の問題も時間が足りなかった。限られた時間の中で、テーマの幅と掘り下げの深さをどう両立させるか。「広さと深さの最適解」を次回こそ模索したい。

（代表質問担当）

聞いた2問のみだった。

ギリギリ参加要件を満たして、滑り込みセーフで初参加した野党への質問数としては妥当だという見方もあるが、結果的に参加要件を満たした政党という「お墨付き」を与えただけになってしまったのではないか。

今回の選挙結果を見ると、取材経験を重ね、政治を俯瞰してみる力を蓄えてきた企画委員と、SNSを情報源とする一般有権者との間で、目新しく尖った主張を掲げる政党への認識が大きく乖離していることを感じずにはいられない。

特定の政党に、集中して質問を重ねる問題はもちろんある。しかし一過性のものと放置しては、社会の分断リスクが高まる現実を前に、私たちは政党の輪郭をより浮かび上がらせる努力が一層求められているのではないか。

（総合司会担当）

実施要領メモ

▼日時：7月2日（水）15：00～17：00（公示7月3日）10階ホール▼登壇者：石破茂自由民主党総裁、野田佳彦立憲民主党代表、吉村洋文日本維新の会代表、齊藤鉄夫公明党代表、玉木雄一郎国民民主党代表、田村智子日本共産党委員長、山本太郎れいわ新選組代表、神谷宗幣参政党代表▼進行：【第1部】（約55分）8党首が「一番訴えたいこと」をボードを用いながら主張（持ち時間1分）。その後、党首同士の討論。相手を指名して質問、相手が回答（各1分）、質問者がさらにコメントする（30秒）の形式で2巡行った。【第2部】（約60分）企画委員の代表が質問（回答時間は1分）▼総合司会：小栗泉企画委員、第1部司会：山下毅企画委員、代表質問者：橋本五郎、伊藤宏、佐藤千矢子、奥村茂三郎の各企画委員▼参加者数：会場（スチル・ムービー含む）185人、オンライン89人▼NHKが生中継。民放の中継代表はTBSテレビ。ムービーはテレビニュース映画協会代表（テレビ朝日、テレビ東京、東京写真記者協会代表（共同通信、時事通信）など10社17台▼スチルは東京写真記者協会（各社1人）、在日外国報道協会代表（Getty Images）▼参加政党の一部が公式のスチル、ムービーを入れた▼会員向けにライブ配信を行った。日本記者クラブ写真撮影は笠原克生氏。

※第1部終了後、政党要件のいずれかのみを満たす日本保守党の百田尚樹代表、社会民主党の福島瑞穂党首の主張（各1分）を動画で紹介した。

開催直前、7党が8党に

党首討論会に参政駆け込み

政党の動きはゴールデンウィークが明けて間もなくだった。5月9日、社民党党首の福島瑞穂さんが事務局を訪ねてきた。「第27回参議院選挙前の党首討論会への参加了承を求める申し入れ書」を携えていた。

国政選挙を前にした日本記者クラブ主催の党首討論会は1990年以降、定例化している。今回の参院選をめぐっても実施すべく、検討は進めていた。招く政党は以前から「国會議員が5人以上所属している」「直近の国政選挙で2%以上の得票があった」という国政政党の要件の、「どちらか」もしくは「両方とも」を満たすという組み合わせで、企画委員会が決めてきた。

昨年の衆院選ではこの要件を両方とも満たす政党の党首を討論会に招き、国會議員が5人に満たない社民党と参政党は外れた。福島さんの申し入れは「前回の決定は見直してほしい」という趣旨だった。「法の下

を受け取り、企画委員会にはきちんと伝えると回答した。参政党の来訪はなかったが、同じ5月9日付で神谷宗幣代表名の「党首討論会において少数国政政党の参加を求める要望書」が送られてきた。

両党の申し入れ・要望は5月13日にあった企画委員会に報告した。委員会では、招く政党をどうするか話し合われた。議論はおおよそ煮詰まったが、最終的には企画委員長、討論会の司会と代表質問団が細部を含めて詰めることになった。

その後、参院選の日程が固まり、両党へは6月25日に回答した。①昨年の衆院選と同様に国政政党の要件を両方とも満たす政党の党首を招く②招かない国政政党については、協力いただけるなら1分以内のビデオで主張を討論会中に流す——という内容だった。

福島さんからはすぐに「とても残念です。対応を検討する」と電話があり、翌日には党幹部が抗議に訪れた。参政党から直接の反応はなかったが、支持者からと思われる抗議の

メールが届き始めた。昨年は事務局の電話が2日間にわたりほぼ使えないほどだったが、今回、抗議電話が殺到することはなかった。

「いつまでに5人になれば」 問い合わせに対応を相談

6月27日になって参政党の広報担当から電話が入った。「所属国會議員の数はどうように確認するのか」「いつまでに国會議員が5人になれば参加できるのか」という問い合わせだった。

参政党の所属国會議員はそれまで4人だった。どこから1人を所属議員に加えて「国會議員が5人以上」という要件を満たそうとしていることがうかがえた。

こちらが示した討論会への参加条件を満たせば、招かない理由はない。ただ、討論会は7月2日に迫っていた。社民、参政両党への回答と前後して、参加する各党の党首には「7党党首討論会」として案内を出し、おおむねこのように進行するという案も示していた。党首同士が相手を目指して討論もするので、直前になつての条件変更は望ましくない。

企画委員と相談し、所属国會議員が5人以上になったことが総務省への届け出などによって確認できれば、党首討論会に招きたいと参政党には回答した。ただし、すでに参加が決まっている政党にとっては参加政党の急な変更になるため、その周知などを考慮し、6月30日時点での所属議員数で判断する、と「締め切り」を設定した。

参政党が記者会見を開き、無所属の参議院議員1人の入党を発表したのはその30日だった。

討論会への参加の意志を確認した上、参政党に招請状を送った。討論会の日には、各党首の先頭を切って神谷宗幣さんが駆けつけた。

日本記者クラブ賞・特別賞 受賞記念講演会は同じ日に

日本記者クラブ賞・同特別賞の受賞記念講演会は昨年、受賞者が3組になったため、2度に分け実施した。1度に開催すると長時間になつてしまつたためだが、二つの講演会の間があき、さらに贈賞式からも間延びしてしまうという問題が生じた。

今年も3組の受賞となったが、6月30日に1度を実施することにした。受賞者の講演と質疑の時間を短くした。それぞれもう少し話を聞きたいという思いもあったが、2度に分けるより関心は高まつたように思う。

(江木)

「原子爆弾によって、私の人生の色とおいと、照り返しが、どのようになっただか、お話しします」

舞踊歴74年目。広島生まれの世界プリマ・バレリーナの足跡は、そのまま日本の戦後復興と重なる。幼くして才能を見いだされ、上京し、さらに海外に活躍の場を広げても、常に根っこにあったのは故郷への思



「被爆一家に生まれ、不器用な、体の弱い森

「戦後80年を問う」⑫

森下 洋子

松山バレエ団理事長・団長、プリマバレリーナ

平和の意志舞い、信じる

7月4日

いと、平和への願い。会心の冒頭、舞台姿そのままのエレガントな空気をたたえながらも、その強い信念と覚悟を語った

被爆した母は戦後3年目に森下さんを生んだ。娘の健康を願う母の希望で、3歳から始めたバレエが、人生を変えた。地道なレッスンも、ただただ楽しかったとはほ

下洋子は、まるで原爆戦争を基に、自分の肉体と精神を作る道を行ってきたように感じます」

ヴァルナ国際バレエコンクールでの金賞、英ローレンス・オリヴィエ賞、パリ・オペラ座バレエ団への出演など「日本人初」の称号が付いて回る輝かしい経歴は、この身長150センチの体から生まれた。70歳を超えた今日まで現役プリマとして、全幕作品を踊る稀有な存在だ。その不屈の精神は、最愛の祖母から受け継いだ。「祖母は左半身を被爆し、大やけどを負った。でもすぐく明るく前向きな人で、『私はお経まで上げて

らったのに、生きていられる』って、笑いながら言うんです」

生家では、原爆が話題になることはほとんどなかった。むしろ祖母は、孫に生きる喜びを伝え、不自由になった親指を嘆くのではなく、機能できる指が残った感謝を語った。「おばあちゃんの精神力、強さってすごいって後になって感じました」

世界で戦禍が続く今こそ、舞台の上から平和を訴え続ける決意を述べた。「今の私の振り、舞い、魂が、平和の姿、意志を表していると、恥ずかしさもなく信じています」

産経新聞社文化部 飯塚 友子

今月のゲストの皆さん

ゲスト全員の会見レポートは右のQRコードを開きウェブサイトで見られます。出席欄の「会」は会場、「オ」はオンラインの参加人数です。



荒川 隆さん 一般財団法人食品産業センター理事長



「6月に成立した『食料システム法』の理念の下で、消費者も納得する再生産可能な米価格水準の実現と、米需要の維持拡大を同時に追求すべきだ』『主食用だけでなく加工用や米粉用等の需要に応じた生産は不可欠』『(輸入米との)圧倒的なコスト格差への財政支援が必要だ」

■ 7・15/出席：会20人、オ48人/『「コメ」はいつまで主食かー価格急騰を考える』⑦/司会：西山公隆会員

林載桓さん 青山学院大学教授



「習近平の軍事改革は終わっていない。領導体制改革から政策・制度改革に移行している。組織体制再編も続くだろう』『習氏個人の権威と権限を高め、軍の統制を任せる構造が続くと、後継者を想定できない』『軍隊統制の個人化は今後の権力継承のプロセスに重要な影響を与えるだろう」

■ 7・22/出席：会14人、オ34人/「中国で何が起きているのか」②/司会：高橋哲史委員

*下記のゲストの会見レポートは5～8ページに掲載しています

森下 洋子さん 松山バレエ団理事長・団長、プリマバレリーナ

■ 7・4/出席：会47人、オ23人/「戦後80年を問う」⑫/司会：中村正子委員

池澤 夏樹さん 小説家、詩人

■ 7・16/出席：会40人、オ49人/「戦後80年を問う」⑬/司会：尾崎真理子委員

秦 早穂子さん 映画評論家

■ 7・17/出席：会17人、オ24人/「戦後80年を問う」⑭/司会：小林伸年委員

澁谷 梨絵さん シブヤ代表取締役

小池 理雄さん 小池精米店代表

■ 7・18/出席：会12人、オ34人/『「コメ」はいつまで主食かー価格急騰を考える』⑧/司会：石原淳子委員

坂東 眞理子さん 昭和女子大学総長、初代内閣府男女共同参画局長

■ 7・23/出席：会22人、オ30人/「戦後80年を問う」⑮/司会：早川由紀美委員

松本 正生さん 埼玉大学名誉教授

■ 7・24/出席：会38人、オ51人/「2025参院選：世論調査が語る民意」/司会：伊藤宏委員

茂木 友三郎さん 日本生産性本部名誉会長、キッコーマン取締役名誉会長・取締役会議長

■ 7・25/出席：会25人、オ45人/「戦後80年を問う」⑯/司会：菅野幹雄委員長



「戦後80年を問う」⑬
池澤 夏樹 小説家、詩人

7月16日

作中の女性母の無念重ね

国内外を旅しながら、小説や詩、エッセーなど様々な分野で活躍してきた作家の池澤夏樹さんは、現代日本文学に柔らかな一陣の風を吹き込んできた。『一九四五年に生まれて池澤夏樹 語る自伝』（聞き手・文尾崎真理子、岩波書店）の刊行を機に開かれた記者会見は、そのたたずまいの源に涼やかに迫った。

強い影響を受けた作家で読売新聞元編集委員の日野啓三の記憶。ギリシャをはじめ、沖縄やフランスなど様々な場所に身を置き得たもの。2007年から個人編集の形で河出書房新社から刊行し、出版界に大きなインパクトを与えた世界文学全集と日本文学全集、東日本大震災や現代社会について——。会見は、人生と筆業を改めて振り返る場となった。心に残った

のは、活動の源流に母親や伯母など女性の存在があると振り返ったことだ。池澤さんの母、原條あき子は詩人として才能を囑望されていた。夫となる福永武彦が参加したマチネ・ポエティクに同人として加わった。だが池澤さんを産んだ後に離婚し、子育てや生活に追われた。研究者だった伯母は戦後の時代に阻まれ、仕事を深められなかった。

「気がつく、僕はよく小説の主人公を女性にしていた。母親や伯母のできなかったことを、作中の女性にさせているのではない。母親や伯母の無念を晴らしているのではないかと後で思われました」

池澤さんの作品は、かつて男性中心だった戦後日本文学の中で異なる質感を持っている。また長女の池澤春菜さんは文筆や声優の世界で活躍する。その理由の一端を感じさせた。

戦後80年の課題については、「世界で啓蒙思想が崩れ、『王道』ではなく、『覇道』の政治家ばかりになっている。デマゴーグが世界を動かすし、SNSが増幅している」と危機感をあらわにし、硬派な面を見せた。

読売新聞社文化部次長 待田 晋哉

「戦後80年を問う」⑭
秦 早穂子 映画評論家

7月17日

自分の目で見る大切さ



ヌーベルバーグ（新しい波）の代表作「勝手にしやがれ」。映画会社からパリに派遣されていた秦早穂子さんは編集前の20分の映像

を見て「これは私たちの時代の映画だ」と直感し、買い付けることを決めたという。タイトルも原題の「息切れ」では若者の心に響かないと考え、「勝手にしやがれ」に替えた。日本にいる上役から猛反対に遭ったが、押し通した。アラン・ドロンの出世作「太陽がいっぱい」の邦題を付けたのも秦さんだ。

カトリヌ・ドヌーブさんについても興味深い話を披露した。フランスが保守的でカトリック教会の力も強かった当時、若くして未婚の母となった彼女に対する世間の反応は辛辣だった。

そうした中で開催された1964

年のカンヌ映画祭。ドヌーブさん主演の「シエルブルの雨傘」が上映され、映画が終わると観客が自然に立ち上がり、会場が大きな拍手で包まれたという。秦さんは映画のストーリーとも相まって「これも生き方ね」と思った。あの拍手はカトリヌ・ドヌーブという生意気な女の子の生き方への共感だったとし、素晴らしい瞬間に居合わせたと振り返った。

秦さんは渋谷のハチ公が生きていたころをご存じだ。「ハチ公はりりしい銅像とは大違い。耳の垂れ下がった汚い犬だった」と明かした。

これらのエピソードが物語るのは、秦さんが常に本質は何かを見定めようとしていた姿勢である。そして、それは多感な少女時代をすごした戦中、戦後の体験によって培われた。「大人から教わったことがそうじゃなかった。何がどうだったかを今も探している」

秦さんが強調したのは、自分の目で見ることの大切さ。「今の時代がああ時代のようには怪しい時代になっていることを痛感するから」生き証人の話は貴重だ。改めてそう思った。

企画委員 時事通信社解説委員

小林 伸年

「コメ」はいつまで主食かー
価格急騰を考える」⑧

澁谷 梨絵

シブヤ代表取締役

7月18日

小池 理雄

小池精米店代表

米騒動 23年冬すでに気配



会見前に配られた説明資料に目を通して、ある一文が目が留まった。「米騒動の発端は、間違いなく2023年の夏の異常気象(高温と渇

水)」。心当たりがあった。

新潟支局にいた23年8月、越後平野に乾いた熱風(フェーン)が吹き、県内は記録的な少雨にも見舞われた。この影響で秋に収穫された新潟県産コシヒカリは、見た目の品質で最も高い「1等米」の比率が4%に激減する被害を受けていた。新潟県は生産量で日本一のコメどころだ。

この年の異変を取り上げたのは、東京・原宿で唯一の米穀店「小池精米店」の3代目代表、小池理雄さん

(写真右)。「11月か12月ぐらいに『お米がない』と業界の中でもう騒動になった。『もしかしたらえらいことになるな』と、我々の感覚では一昨年の冬からあった」。その理由に等級が2等以下に落ちると、1等と同じ量の玄米を精米しても、白米になる量が少なくなる問題を指摘した。

ただ供給不足はすぐに起きなかった。実際にスーパーの棚からコメが消える騒ぎが起きたのは24年8月以降。南海トラフ地震臨時情報などを受け、消費者らがコメの端境期に買いために走ったのが端緒とされる。

都心の百貨店などで米穀店を構える「シブヤ」の澁谷梨絵代表(左)は当時、飛ぶように売れるため、千葉の産地に車で買い付けに走った時の苦労話を明かした。「詰めるだけ詰めてお店に持って来てもすぐ売れてしまう。(多忙で)2、3週間は記憶がないぐらい」。不足感から産地で起きた24年産米の調達競争が米価高騰の要因の一つとされるが、政府はさまざまな原因を現在検証している。

コメの生産現場で何が起きていたのか。今夏も高温や渇水が懸念されている。25年産米の価格が見通す時、2人が経験した出来事が再び起きないかどうかの視点も欠かせない。

毎日新聞社経済部 中津川 甫

「戦後80年を問う」⑮

坂東 眞理子

昭和女子大学総長、初代内閣府男女共同参画局長

7月23日

「核分裂家族」制度に歪み

戦後の男女共同参画・女性政策を実務者の立場から振り返り、次の時代に向けて取り組むべき課題を指摘した。

GHQによる5大改革指令の筆頭は「女性の解放」だ。憲法は男女平等を、労働基準法は男女同一賃金を規定し、民法改正で家制度も廃止された。だが男女平等の社会を実現するには時間がかかる。世界経済フォーラムによるジェンダーギャップ指

数の順位はG7の中で最下位だ。

男女雇用機会均等法を作る際、経済界は「女性が男性と同じ働き方などできるわけがない」と猛反発し、



骨抜きになった。女性が結婚・出産しても働き続けるようになったのは均等法より育児休業法の影響が大きかったと振り返る。198

9年に合計特殊出生率が1・57と過去最低を記録し、育児休業法は「する」と成立した。

全閣僚が参加する男女共同参画推進本部などが立ち上がる一方で、第1次安倍内閣時代には激しいジェンダーバッシングも体験した。「女性議員の数を増やせばいいというものではない」と考えたこともある。

女性の活躍を可能にする政策は積み重ねられているのに、なぜ格差は解消しないのか。背景の一つが家族の変化だ。会社員の夫と専業主婦の妻と子どもから成る核家族は高度成長期に主流となり、これを前提として税制や第3号被保険者制度などの社会保障制度が確立した。だが今や共働き世帯が圧倒的に多く、男性の50歳時点未婚率は3割近い。離婚数は婚姻数の3分の1だ。「核家族から核分裂家族へと変わり、既存の制度に歪みが生じている」と指摘する。

性別役割割に対する思い込みは社会の様々な場面にあり、女性自身が自分の可能性を抑えている面もある。ただ、その多くは高度成長期に確立したもので日本古来のものではない。「次の時代にどのような社会を作るのか、改めて考える必要がある」と締めくくった。

日本経済新聞社編集委員 中村 奈都子



それは、永

「2025参院選…世論調査が語る民意」

松本 正生

埼玉大学名誉教授

7月24日

大敗の予兆 地方首長選に

日本人の政治意識や世論調査の分析、研究の第1人者で、日本記者クラブでの登壇は13回目となった。2010年に創設した埼玉大社会調査研究センターは20年にベンチャー企業化し、自ら代表取締役社長に就任。同社が実施するNTTドコモのスマートフォンユーザーを母集団(約7400万人)とする調査方式「dサーベイ」は高い精度を誇っている。自民党大敗、与党過半数割れ。こうした結果を生んだ先の参院選については「投票した人だけでなく、投票しなかった人たちの民意を読む必要がある。投票した人だけに焦点

田町における権力闘争の図式を中心に据えて政局を捉えがちな今の政治報道への警鐘にも聞こえた。

今回躍進した参政党については「既存の野党が壊せなかった自民党政治を容易に破壊してくれた」とし、有権者レベルで構造変化が起きていると分析した。

予兆は今年4月に実施された地方の首長選挙、とりわけ市や町の小規模な自治体選挙で現職が新人に相次いで敗れたことに現れていたと指摘。そうした現象が全国的に発生し参政党の躍進をもたらした、との見立てだ。

投票日前日に東京・芝公園で開かれた参政党の演説会については「集まった人たちにとって、前夜祭だった」と評した。事前の情勢調査から、すでに投票を済ませた支持者が多く参加したと推察されるためだ。

一方、「日本人ファースト」を掲げた参政党が訴えた「外国人問題」が今回の大きな争点として取り上げられたことについて「ちよつと違う気がする。他の政党が過敏に反応し、政府も対策室を作ったため、どこも外国人対策を打たないわけにはいかなかった。これは争点とは言えない」と疑問を呈した。

時事通信社解説委員 山田 恵資

「戦後80年を問う」⑩

茂木 友三郎

日本生産性本部名誉会長、キッコーマン取締役名誉会長、取締役会議長

7月25日

50代以下の世代に期待



戦後、高度経済成長が始まる頃から企業の第一線に立ってきた経営者である。敗戦を10歳で迎え、小学校で教科書の半分くらいを、

進駐軍の指示により墨で塗りつぶした。「戦争に負けると、こうなるのだな」と思った」そうだ。「新制中学に入ると、英語が必修科目なのに、英語の教師が1人もいない」状態だった。そんな中で、戦後、日本にきた米国人が醤油の味を覚えたのに着目し、キッコーマンは、米国の市場の開拓に本格的に取り組んだ。創業家の一員である茂木氏は、米国に留学してMBA(経営学修士)を取得し、米国への工場進出のために奔走した。

茂木氏が6月まで会長を務めた日

本生産性本部は昭和30年の創立である。「欧米に学ぼうという運動を展開し、企業経営者や労働組合の指導者などの視察団を欧米に派遣した」。こうして企業経営は近代化し、日本は奇跡的な経済成長を遂げた。

欧米に追い付いた後、バブル経済に突入。「日本全体が浮かれてしまったように感じた」。そう語る茂木氏は「バブル崩壊後、株価や地価が大暴落し、その後遺症で、経営者が委縮したのが失われた30年の大きな要因だ」と思っている。

このため「バブル崩壊の怖さを直接体験していない50代以下の世代に私は大いに期待したい」と強調した。世代がかわれば「リスクを恐れず、思い切った投資ができるのではないか」と考えるからだ。

日本経済の再活性化には、何よりも「需要の創造が必要」と説く。「ではどうすればよいのか、イノベーションと、ディフュージョンと、つまり差異化を進めることだ」とはいえ日本は様々な困難を抱えている。「経営には志、理念、議論、中長期のビジョンが不可欠だ。国にも同じことが言える。日本は国家戦略が問われている」と、気がかりな政治にも注文をつけた。

日本経済新聞社出身 森 一夫

2025年度日本記者クラブ賞・特別賞 受賞記念講演会

6月30日開催。一般からの参加を含め、参加人数は会場52人、ウェブ38人。

「小文字で語る」縁側から

クラブ賞 大島三緒さん

(日本経済新聞社論説委員会「春秋」担当兼総合解説センター編集委員)



新聞のコラムには120年の歴史がある。うち20年近く、日本経済新聞1面「春秋」の筆を執る。社説が「大

文字」で「床の間」から論を「説く」のに対し、コラムは「小文字」のオピニオンを「縁側」で読者に「語る」と評す。どんな言葉を選び、何を伝えるか。文学、映画、時には歌詞から、簡潔に核心をつく一言を探り、「自由だけどやっかいな」書き言葉と孤軍奮闘する。ネタは、自分の中に子どもの頃から積み重ねてきた記憶から引っ張ってくる。戦後80年の今、「戦争で周縁部分の人たちが苦勞した」ことを意識して、引き出しを増やしている。

数多ある自作から、今年5月16日付を取り上げた。大阪万博のウクライナブースで戦時下の光景を見たことを綴り、70年万博で詠まれた短歌を引用し

て結んだ。「亡き父の征き苦しめし国なればビルマ館の列に我は並びぬ」〔昭和萬葉集〕。55年の間に日本人が戦争を忘れた、との想いを託した。

「歴史意識と批評性」はコラムの命という。AI（人工知能）の文章力が格段に上達してきたが、オピニオンは書けまいとみる。最後に「気持ちが入るかどうかが問われるからだ。AIにまねができない自分だけの言葉を、今日も紡ぐ。

読売新聞社出身 稲澤 裕子

「抜かれ」に活を入れられ

特別賞 中国新聞社「決別 金権政治」取材班

(荒木紀貫 中国新聞社編集局次長兼報道センター長兼編集委員室長)



河井克行元法相夫妻による空前の大規模買収事件。中国新聞はこれをきっかけに7年に及ぶ取材で政権の

カネの問題を指摘する大スクープをものにした。しかしその過程は「抜かれ」の連続だ。

そもそも報道は週刊文春の「車上運

動員の買収」から始まる。裏も取れず、

文春を引用して「追いかけ」。情報提供先として地元紙が選ばれなかった屈辱もあり、「抜かれたら抜き返せ」が目標に。地元議員を回って「ばらまき」

の反転スクープを出すも、今度は読売が「被買収40人の一覧」、さらに「検察の供述誘導疑惑」を報道。それでも抜き返せと買収資金の原資の追及を続け、「すがつち500」などという手書きメモの存在を把握。甘利明氏による100万円提供などの裏を取り、背景に政策活動費や機密費の存在を浮かび上がらせた。リーダーの荒木氏は、「やられるたびに活を入れられ、取材を続けることができた」と明かす。惜しむらくは、他社が追いつけなかったことだ。「検察も捜査しきれなかった話を中国新聞一社ではできない。メディア全体の力で事実を明らかにし、政治家の説明責任を果たさせることができな

いかと期待していた」と締めくくったのが印象に残った。スローニュースシニアコンテンツプロデューサー（NHK出身） 熊田 安伸

元患者の重い言葉胸に

特別賞 三重テレビ放送ハンセン病問題取材班

(小川秀幸 三重テレビ放送編成局長、ハンセン病関連映像担当)

ハンセン病の療養所がない三重県の



独立テレビ局で、ずっと報道制作局にいた小川さんがこの問題を追い続けたのはなぜか。きっかけは200

1年、隔離政策を憲法違反とした国家賠償請求訴訟の熊本地裁判決だ。県の元担当者とは出身の元患者との交流を取材して以来、岡山の療養所で暮らす三重県出身者の里帰りなどを伝えてきた。

管理職に昇進しても、合間を縫って撮り続けた。「相手との信頼関係からも、取材は人任せにできなかった」ドキュメンタリーは12本に及ぶ。伊勢神宮を抱える県として「神都浄化」に走った戦争中の事情を掘り下げ、コロナ禍では「感染症と差別」という視点で取り上げた。「かけはしーハンセン病回復者との出会いから」など2冊の著書も出し、三重県との共催のフォーラムや教職員向けの講座も担った。

「差別するのは人間だけだ」――講演では、元患者たちの重い言葉を紹介した。「故郷のことは思い出さないようにしている」とは、今も差別や偏見が消えない現実へのやるせなさからだ。報道現場を離れても、「ハンセン病関連映像担当」としている。ハンセン病を「終わったことにしない」ために。

読売新聞社出身 鈴木 嘉一

イスラエル イラン核施設空爆

大橋 孝臣(NHKイスタンブール支局長)

「12日間戦争」とは何だったのか

出張中の6月13日の未明、東エルサレムのホテルで就寝中、これまで聞いたことのない携帯電話の電子音でたたき起こされた。イスラエルがイランを先制攻撃したことに伴い、報復に備えるよう、国民に非常事態を宣言するエリアメールだった。一報原稿を東京に送って直ちにエルサ



イスラエル軍によるミサイル攻撃を受け、煙が立ち上るテヘラン市内(6月15日/テヘラン支局・土屋悠志撮影/NHK提供)

レム支局へ向かい、怒濤の12日間が始まった。この間、通常のニュース枠以外にも特設のニュースが何度も立ち上がり、その都度、エルサレム、テヘラン両支局の記者らと戦況や見通しを中継を交えて伝えてきた。

トランプ大統領が言う、この「12日間戦争」とは何だったのか。長年築き上げられてきた常識や国際社会の規範などが覆された、そんな戦争だったように思えてならない。

常とう句、自衛攻撃を強行

正しい戦争などあるはずはないのだが、イスラエルのネタニヤフ首相は「イランの核濃縮プログラムや弾道ミサイルプログラムの核心を攻撃した」と主張。イスラエル国家存亡にとつての核心的脅威を取り除くための「自衛攻撃」との認識を強調した。イスラエルという国を公然と否定してきたイランが核兵器を持つこととの脅威を繰り返し返したが、この「自衛のための攻撃」という主張は、ハ

マスに奇襲攻撃を受けて以来、戦争を続ける常とう句ともなっている。

一方、イランのアラゲチ外相は、停戦後の7月、外交団を集めた会見で「国際法の明白な違反行為を非難しなかった国があることを遺憾に思う」と強調した。イランからすれば軍事力によって主権が侵害された中でも、非難の声が上がらないことへの強い危機感の表れともとれる。

外交より軍事力が生む不安定さ

12日間戦争は、中東の軍事大国同士が武力衝突に発展するという、長年懸念され続けてきた事態に陥ってしまったことに加え、アメリカがイスラエルに引きずり込まれる形で参戦したことが、後に大きな禍根を残す危険性をはらんでいる。事実上の核保有国であるイスラエルと、大量の核兵器を保有するアメリカがそろって、NPT(核拡散防止条約)加盟国イランの核施設を攻撃したことが、NPT体制の維持をさらに難しくさせるだろう。核の平和利用を主張するイランがウラン濃縮を60%まで高め、核兵器開発への疑念を抱かせたことが攻撃の背景にはある。ただ、外交より軍事力による解決が優先され、法や秩序が保たれない不安定さが深化したことを、如実に示し

ているようにも見える。

アメリカは、22年前、安保理の決議を得ずにイラクへの武力行使に踏み切った過去を持つ。

アメリカが集団的自衛権の行使だと主張するイラン攻撃への「参戦」は、第2次大戦の教訓を踏まえ積み上げられてきた国際社会の秩序をさらに弱体化させたように感じる。

かつてバグダッドで取材したイラク政府の元高官は「イラク戦争は、全ての侵略戦争に対する扉を開いてしまった。その先にあつたのが、ロシアのウクライナへの侵攻であり、さらに今後同じような侵略戦争が繰り返される恐れがある」と警鐘を鳴らしていた。

12日間戦争は、各地で勃発する戦争や紛争をどう伝えていくかを考える重要な機会にもなった。NHKは今回、テヘランから支局長やスタッフを一時退避させる措置をとり、エルサレム支局でも連日警報への対応を迫られた。どう安全を確保して取材を続けるか、戦時下で中立にニュースの核心を見極め記録することと同様に、重い課題と言える。

おおし・たかおみ▼2000年入局
神戸局 国際部を経て、アジア総局(パ
ンコク)駐在 大阪局デスクなどを経て
カイロ支局長 24年8月から現職



選挙戦最終日、候補者の街頭演説に集まった有権者ら
(7月19日/東京都内/日本経済新聞社提供)＝一部画像処理しています

参議院選挙、自公が過半数割れ 佐藤 理(日本経済新聞社政治部長)

国民・参政が躍進、混乱期に 偽・誤情報に対し積極報道

歴史に残る参院選になった。衆参両院で与党が過半数割れしたからではない。1990年代から日本政治が目指してきた「政権交代可能な二大政党制」が名実ともに終わったからだ。日本は本格的な多党制に移行し、長い混乱の時代に入る。

選挙報道は難しい。普段の取材先は実在の政治家だ。選挙になると雲をつかむ話になる。顔が見えない集

合としての世論が相手になる。

記者は現場でどんな組織がどれだけの力で候補を支援するかは取材できる。候補者や支持団体が感じる手ごたえも聞く。もちろん街頭演説で聴衆の熱量も体感する。それでも最後まで「風」の実体はみえない。

ある種の裏付けになるのは情勢調査だ。今回も日本経済新聞を含めて多くの新聞・通信社・テレビが複数回、調査した。序盤から終盤にかけて、与党である自民、公明両党が厳しくなり、野党では国民民主党と参政党が勢いづいた。どの社もその基調は変わらなかっただろう。

SNSで圧倒した参政党

見極めが難しかったのはネットだ。SNSの拡散数や頻出ワード、検索された回数などは参政党が圧倒し、国民民主党も他党を引き離れた。足で現場を見ても成長期の政党は熱気が段違いになる。リアルとネットの両面で党勢が強く印象に残った。

日経は序盤調査で「自公、過半数うかがう」「50議席を超える可能性」と書き、終盤は「自公大幅減、過半数は微妙」「国民と参政が躍進」と見出しを立てた。

取材の過程を振り返ると、序盤に半信半疑だった与党幹部も選挙戦後半になるにつれ浮足立った。自民党の牙城といわれる選挙区でも、いつもは他選挙区の応援に赴く党幹部が投票票日前日まで地元張り付いた。体感しにくいネットの熱量を誰もが懸命に読もうとした選挙だった。

ネットでは真偽不明の情報が広がった。昨年の兵庫県知事選などを受けて、報道各社は参院選前に選挙報道の方針を公表した。日経も「選挙期間中も通常の報道の基準に照らし、選挙の公正を損なう恐れがある話は積極的に取材して伝える」旨を表明した。有権者への約束だ。

外国人規制に関する話のほか、日経が期待される税財政や経済に関する情報を中心に、多面的に情報を検証した。政治闘争の材料として提示されるテーマでもあり、賛否両面から激しい言葉とともに読者の関心を集めた。「約束」は「報道とは何か」を強く考える機会になった。

今回の参院選の意味に触れておきたい。参政党と国民民主党が二大政

党制にピリオドを打った。参政党は地方議員を多く抱え組織基盤があり、全選挙区に候補者を立てた。全選挙区で自民党票を奪う「保守」政党だ。一方で国民民主党の躍進は野党一本化をさらに難しくした。

こうなると「決められない政治」が深刻になる。法案や予算案を通すため、政党間の取り引きが続く。税財政や社会保障、安全保障といった長期政策を傷つける恐れもある。長く、厳しい時代が始まる。

首相交代や各党の連携・連立はあるだろうが、長期安定には至らない。弱肉強食の国際政治や国際経済の中で、日本政治が不安定であることは巨大なリスクとなるだろう。

「伝える力」の衰え自覚して

最後に。短期的な選挙対策や関心を競うような政治はSNSのアテンションエコノミーと親和性が高い。政治はネットとの相乗効果でさらに短期・刺激に動くはずだ。マスメディアの「伝える力」「届ける力」が衰えた状況が背景にあると、強く自覚して仕事をしていきたい。

さとう・おさむ▼1997年入社 政治部で首相官邸・与党・野党・外務省の各キャップ 経済部 日本新聞協会でマスメディア規制担当 4月から現職

「検証・フジテレビ問題」 井上 義則(フジテレビ検証問題チームリーダー)

「断りづらい人間関係」に焦点 決断と逡巡続いた5カ月

テレビマンとは、テレビカメラを通じて世の現実や声なき声を拾い上げ、視聴者に伝えることを生業とする存在です。その「命」とも言えるテレビカメラを、当時の経営トップは1月17日の記者会見の場に入れず、「クローズド会見」とする判断を下しました。私は一人のテレビマンとして、これまでの生き方を否定されたような衝撃を受けました。ただ一方で「経営陣は、視聴者の納得を得られる言葉を持ち合わせていなかった」と理解ができた面もありました。

「テレビ局の不祥事は、テレビで決着をつけなくてはならない」
検証チームのリーダーを引き受けるにあたっての私の思いでした。

「検証・フジテレビ問題」反省と再生・改革」は、7月6日に放送されました。私は全体を統括する立場として、約5カ月間、決断と逡巡の日々を過ごしました。

当事者へのインタビューが本格的

異例の30人態勢で取り組む

検証チームは、報道局と情報制作局から集まった約30人の社員を中心に構成されました。通常、報道・情報部の常番組では、関わる社員は多くてもCP以下で15人前後ですが、今回は異例の態勢で臨みました。

当然ながら、メンバーの考え方は多様です。番組の方向性についても、「検証を通じて徹底的に社内のおみを洗い出す」ことを重視する意見と、「検証と対応策のバランスに配慮する」意見がありました。ただし、

どちらか一方に偏る社員はおらず、両方の視点がそれぞれの中に混在している状態でした。

チームのマネジメントにおいては、意見を無理にまとめるのではなく、率直にぶつけ合ってもらいながら、その「決着点」を探っていく進め方を心がけました。

私が入社以来感じてきたフジテレビの企業風土とは、社員同士の距離の近さだと思えます。それが「チームの結束力」となり、ムーブメントを巻き起こす原動力となってきました。しかしその半面「断りづらい人間関係」が生まれ、ハラスメント事案の温床となっていた面も否定できません。

検証番組は、以下の3テーマで構成されています。

- (1) 本件の人権侵害事案
- (2) 類似事案・企業風土・企業統治
- (3) 今後に向けた再生策

検証チームが最も力を入れたのが「2」であり「断りづらい人間関係をいかにテレビで描くか」でしたが、この作業こそ逡巡そのものでした。自分もフジテレビの一員として、企業風土を受け入れて、時に自分が「断りづらい人間関係」を生み出していたかもしれません。しかし、その迷いは脇に置いておき、明らかに「社会常識とのズレ」があり、真実相当性に足る内容だけを積み上げていきました。

番組は「現時点での到達点」

「なぜこの人が取材に応じないのか」と疑問に思われた方もいるかもしれませんが、検証チームとしても忸怩たる思いはありますが、今回の放送内容は「現時点での到達点」と考えております。今後の会社の再生・改革については、私も社員として、責任をもって取り組んでいきます。

このうえ・よしのり▼1993年入社「スーパーニュース」「日曜報道THE PRIME」など常番組や「安倍元首相・国葬」ジャーナリズム検証番組」の制作を担当 現在 報道局取材センター室長



検証 フジテレビ問題
～反省と再生・改革～

(フジテレビジョン提供)

大川原化工機冤罪事件

遠藤 浩二（毎日新聞社会部）

警視庁クラブの機能不全
権力監視が記者の存在意義

化学機械メーカー「大川原化工機」の冤罪事件を巡り、社長らが東京都と国に賠償を求めた訴訟の控訴審判決で、東京高裁は5月28日、1審よりさらに踏み込んだ内容で、警視庁公安部と東京地検の捜査を違法と認定した。ストーリーありきのデータメな捜査の実態を取材してきた私にとって、当然の結果だった。

法令解釈をねじ曲げて立件

公安部は国際ルールとは異なる独自の法令解釈を作り上げ、立件に突き進んだ。しかし、高裁判決は、近代的刑法の大原則である罪刑法定主義に触れ、この独自解釈の誤りを指摘した。罪刑法定主義とは「どのような行為が犯罪となり、どのような刑罰が科されるかは、あらかじめ法律で定めなければならない」というものだ。立件の前提とした法令解釈を「合理性を欠く」と断じた。事実上の捏造認定だろう。

私が独自の記事を初めて出したの



東京高裁で東京都と国に賠償を命じる判決が出され、「全面勝訴」の幕を掲げる大川原化工機の大川原正明社長（中央）ら（5月28日/東京都千代田区/毎日新聞社提供）

は2023年12月。法令解釈をねじ曲げたことが今回の冤罪事件の核心だと指摘する記事だった。それから約1年半。法廷で裁判長の言葉を聞きながら「ようやく判決がついてきた」と感じた。

「市民を守る警察官として、この捜査はどうしても許せなかった」。捜査員の夜打ち朝駆けを始めてしば

らくたったある日、ある人から言われた。私はこれまでに複数の捜査員から100時間以上にわたって話を聞き、入手した内部資料や証言を基に記事を出し続けた。3月には『追跡 公安捜査』という単行本も出版した。警視庁の幹部らは私の記事を「誤報だ」などと各社に吹聴していたようだが、どちらが誤っていたのかは判決をみれば明らかだろう。

今回の冤罪事件の問題点は多岐にわたるが、大きく分けると四つある。事件を一から作り上げた警視庁▽捜査の問題点を伝えられたのに起訴を強行した東京地検▽保釈を全く認めなかった裁判所、そして、あまりにも弱腰なメディアだ。字数に限りがあるので、ここではメディアの問題について触れたい。

国賠訴訟の1、2審を通じ、現職警察官3人が「事件は捏造」などと捜査を批判した。保釈を徹底されているはずの公安捜査員が、公開の法廷で捜査の問題点をここまで暴露することは後にも先にもないだろう。今回の冤罪事件は、警視庁の前代未聞の不祥事だ。しかし、各社の報道はあまりにもぬるかった。

えぐる報道はクラブ外から

公安部の捜査の実態を独自にえぐ

った報道は、私の記事と「NHKスベシヤル」しかない。私も番組を手がけたNHKのディレクターも、警視庁記者クラブに所属していない。国内で最も人員を配置しているはずの警視庁詰めの記事たちは、いったい何をしていたのだろうか。

警視庁の幹部らは「捏造証言」が出た直後、「大川原は中国とズブズブだ」「捏造証言をした捜査員は仕事ができない」などと火消しに走った。1審で敗訴しても「控訴審では勝てる」と吹聴し続けた。まさか、そんな戯れ言を信じていた記者はいないだろう。根底にあるのは、警視庁に刃向かうと「逮捕へ」などのネタを取れなくなるという忖度だ。

捜査の過程で、元顧問の相嶋静夫さん（享年72）が亡くなった。国家権力による殺人に等しい。相嶋さんの長男は私に言った。「警察がまずいことをした場合、切り込むのか、黙って見ているのか。今後、メディアがその岐路に立った時、大川原事件を思い出し、『切り込む』という判断をしてほしい」。記者の存在意義は、権力の監視にある。飼いならされてはならない。

えんどうこうじ▼2008年4月入社
鳥取支局 大阪社会部 特別報道部を経て
21年4月から東京社会部

米国の保守思想家を追って ミシガンの小さな村への旅

あれから30年以上たった。米国思想史研究を続ける今の自分をつくり出すとは、当時は思ってもみなかった。その後、幾度もその小さな村を訪れることになったが、それも予想もしなかった。メコスタ村。5大湖に突き出た巨大な半島である米国ミシガン州の森林の深奥部に収まる寒村だ。当時も今も人口400人ほどである。

冷戦の終結は壮大なドラマを引き起こした。「ベルリンの壁」の崩壊、ソ連邦の終焉……父ブッシュ、ゴルバチョフの米ソ両首脳が冷戦終結を宣言した地中海マルタ島での会談は現地で取材した。だが、振り返ってみると、筆者にとって冷戦終結の最大のドラマは、このミシガン深奥部の小さな村への旅だった。1991年の夏だ。訪ねて行ったのは、晩年のラッセル・カーク（1918—94

年）。当時の日本ではほとんど知られていない米国の保守思想家だった。

◆冷戦が終結 米思想史に関心

発端はこうだ。現象としての冷戦の終結は日々目にしていた。ワシントンに駐在していた当時、日々の取材の最大テーマは、STARTと呼ばれた戦略核兵器削減交渉だった。米国をしのぐ数の核兵器を配備するソ連が次々譲歩し、衛星国からも撤退していく。いったい何が起きているのか。向こうは強靱な思想（マルクス・レーニン主義）に支えられてきた。こちら側には、それをしのぐどんな思想体系があるというのか——。

その頃、国務省政策立案局にいた同世代（52年生まれ）のフランシス・フクヤマは「歴史の終わりか？」という論考を発表し、当時起きていた

ことの「意味」を世界に説明しようとした。世界がその論考に衝撃を受けた。彼とは長い交友を持つことになった。やはり同世代で、フクヤマ同様に「政治任命」でレーガン・ブッシュ両政権に加わっていた友人から、1冊の絶版になっていた本を渡された。ジョージ・ナッシュ著『1945年以降の米国における保守思想運動』（76年刊、未訳）だった。

これも、のちに長い交友を持つことになる碩学^{せきがく}ナッシュ（45年生まれ）のハーバード大での長大な博士論文である。多忙な仕事の合間に、必死になつて読んだ。そこに練り広げられる未知の歴史に圧倒された。レーガン政権誕生（81年）という政治的結実をもたらし思想のドラマを、膨大なテキストと数多くの知識人たちの書簡のやりとり、直接対話に基づいて描き切る。



あいだ ひろつぐ
会田 弘継

1976年共同通信社入社 ワシントン支局長 論説委員長などを経て 2015年から24年まで青山学院大学教授 関西大学客員教授などを歴任 著書に『追跡・アメリカの思想家たち』『破綻するアメリカ』『それでもなぜ、トランプは支持されるのか』など 訳書にF・フクヤマ『政治の起源』 R・カーク『保守主義の精神』など

◆人生を変えた自宅への誘い

その中に現れた知識人の中で、思索の内容から、もっとも引かれた一人がカークだ。著書を探して読み出した。まだ70代前半で健在らしい。インターネットもEメールもない時代である。本人に会ってみたくて思ったが、どこの大学にも属さない在野の著作家で（ナッシュもそうであった）、ちがいが明かない。そうこうしているうちに、カークがワシントンのシンクタンクに講演に来ると知った。91年春のことだ。仕事の合間に駆けつけ、講演が終わった後に記者の特権で取材と称してアプローチした。聞きたいことがヤマほどあつて、話が終わらない。カークにはミシガン州の自宅に戻る飛行機の便の予定がある。同伴の夫人が発発を促しながら、「うちへいつでもいらつ



メコスタ村のラッセル・カーク邸の前に立つMichigan州史跡標柱と筆者（2019年9月/筆者提供）

その時は、こちらが無知で名前を聞いてもピンと来なかったが、若い頃からの親しい友人の一人が、イェール大学で日本文学を教えているエドウィン・マクレラン（1925—2009）だという。のちにマクレランと会って、さらに思いがけないカークと日本との縁を見つけた。生前のマクレランは、英語圏世界で最高の漱石研

しゃい。何日でも、話したいだけ話しにきなさい」と、自宅住所と電話番号を渡してくれた。初対面なのに信じられない申し出だった。今振り返れば、人生を変えた瞬間だったと思う。

もちろん、通信社のワシントン駐在「下っ端」記者が、当時の日本では誰も知らないような在野の保守思想家を訪ねて、はるかミシガンへ行くことなど許されるわけもない。ちょうど湾岸戦争が終わったところで、冷戦後世界は激しく動いていた。ただ、まもなく3年の任期を終えて、夏に東京へ帰任することが決まっていたので、帰任時に夏休みをとって訪ねようと決めた。

その7月、冷戦終結時の激動の3年を過ごしたワシントンの街に別れを告げ、妻と娘3人を10年落ちのボ

ロ車に乗せて、道路地図帳を頼りにメコスタ村に向かった。「部屋はいくらでもあるから、何日でも泊まっていきなさい」。カーク夫妻の申し出だった。

◆日本との不思議なつながり

ほぼ1週間滞在した。何もない寒村で、カークや他の各地からの訪問者ら（学者や学生）と食事をともにしたり、対話したりした。日本には来たこともないカークだが、不思議なつながりを持っていた。著書にものぞき見ることができたが、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の愛読者であり、思想（史）家としての著作の一方で、米国中西部や南部に残る怪奇譚の伝統を維持する作家でもあった。

究家と見なされていた。イェール大学で彼の下で学んだ中には、文芸評論家、柄谷行人や作家、水村美苗らがいる。文芸評論家の江藤淳は、60年代はじめの在米研究時にマクレランと出会い、生涯の友となった。漱石つながりである。99年の自死直前に書いた『妻と私』の書き出しは江藤・マクレラン両夫妻の会食だ。

英語圏で流布し読まれる英訳の漱石『こころ』はマクレランがシカゴ大学博士課程にいた時に、恩師でのちのノーベル経済学賞受賞者F・A・ハリエクに読ませるために訳したものだ。英国人であるマクレランをハリエクの下での思想史研究に送り込んだのはカークであり、英訳『こころ』を出版したのは、カークの主著『保守主義の精神』（53年）を出版した新興出版社であった。

こうしたことすべては、91年のメコスタ村訪問当時には知らなかった。それから、長い年月をかけて、本業の合間に少しずつ解明し、論壇誌などに発表し、今日に至るまで著書に収めたりすることになった。

戦後米国の保守思想史に大きな足跡を残したカークの生涯については、いくつもの評伝が書かれており、カーク自身が死を前に書き残していた自伝もある。没後20年以上たった

2015年には研究者による600近い、浩瀚な決定版評伝が出版されているが、マクレランは登場しない。カークの自伝のある時期には交友の記録が頻繁に登場するにもかかわらず、そうなのである。評伝と自伝は、それぞれの物語を語っているようなところがある。どちらが正しいとか誤りとかいう話ではない。歴史叙述というのは難しいものだと思う。

◆原爆投下と「進歩」への疑念

ただ、両者を通じて見えるのは、20世紀を生きたこの米国の代表的保守思想家に、ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下は大きな衝撃を与え、近代文明の行方、「進歩」という考え方に強い疑念を抱かせたということだ。その前段には第2次大戦期の日系人収容への怒りもあった。

そのことと、戦後、漱石学者となるマクレランと知り合い『こころ』の英訳出版を手助けする経緯には、偶然であるようで、どこか連関がありそうに思っている。漱石をはじめて読んだハリエクの反応はほぼ解明したが、カークの反応はまだよく分からない。この秋もメコスタ村を訪問し、カークの遺族と会い、資料をのぞくことを計画している。

私が会ったあの人

与謝野馨さん 元官房長官、元財務相

財政守る「黄金の釘」

三沢 耕平(毎日新聞社)

給付か減税か——。ばらまき合戦の様相を帯びた7月の参院選を見るにつけ、そのどちらにもあらがった政治家を思い出した。与謝野馨さん(享年78)だ。

与謝野さんを追いかけて始めたのは、福田康夫政権のころ。都内の一軒家に「夜討ち朝駆け」するのが日課だった。自宅前には常に数十人の記者がずらり。特ダネに飢えていた私は行き付けのバーや雀荘に突撃するなどして、サシ(一対一)の機会をうかがった。

知遇を得たわけではないが、顔を覚えてもらって以降はよく絡まれた。「今日は何たくらんदैいる?」「くだらない質問しかしねえくせに」。「政策職人」から何かを学びたいと考えていた私は、そんな「毒舌」も心うれしかった。

与謝野語録でよく耳にしたのが「シャープ勧告以来の大改革」。入るを量って出づるを制す「改正」

ではなく、「改革」の必要性を繰り返して説いていた。

財政を守る執念を感じたのは、リマン・ショック後の景気刺激策として実施された定額給付金を巡る攻防だ。深夜まで続いた自公幹事長会談で実施が決まった際には、日付が変わった未明に会談場所のホテルに乗り込んで「待った」をかけた。2009年度税制改正法の附則に「消費税を含む税制の抜本的な改革」を明記するなど、後の消費税引き上げへの布石を打つことにも執念を燃やしていた。

菓子の包みは公約の「紙」

1度だけ、スクープをもらったことがある。08年秋の自民党総裁選に出馬したときのこと。与謝野さんの公約が「紙」になったことを知った私は、それをゲットしに事務所に向かった。

「公約はもう紙に?」

「国家100年の計を書いた」「今日は1面が空いています。ぜひ、『紙』を……」

大きなあくびをして黙り込む与謝野さん。結局、けんもほろろに拒否されて帰路につくと、携帯電話が鳴り、「お土産にお菓子をあげるから事務所に戻ってこい」。

お菓子をもらうと、その包み紙が公約の「紙」だった。「堂々たる政治」「シャープ以来の税制抜本改革」。与謝野節あふれる公約集を記事にし、翌日の1面に掲載した。

毀譽褒貶相半ばした政治家でもあった。09年に自民党が下野すると、翌年に「たちあがれ日本」を結党。「たちあがれ」も離党し、民主党政権の閣僚になって消費税増税に携わった。その変節ぶりには、側近議員も「暴走老人だ」と困惑顔だった。

財政監視記者として「釘」

39歳でがんの告知を受け、4種のがん発病と闘った。健康状態を問うた時の答えが忘れられない。

「俺から仕事を取ったら死んじやうから」大手術を繰り返すうち、いろんなことが小さく見えるようになっていったのだろう。

変節批判も何するものぞ。死線を越えた先には、政策を実現すること以外、全てのことが小さく映っていたのだらう。

祖母は歌人の与謝野晶子。好きな歌を覚えてくれたことがある。

「劫初より 作りいとなむ殿堂に われも黄金の釘一つ打つ」

生きた証しを世に残す。そんな人間の矜持を詠んだ歌だ。パラマキを連呼するポピュリズムに覆われる時代。与謝野さんが打ち込んだ「黄金の釘」に思いをはせるとき、財政を監視するジャーナリストのはしくれとして、それに続く釘を打たなければと切に思う。

(みさわ・こうへい 1998年4月入社 現在 経済部長)

与謝野馨さん(2009年3月19日/東京都千代田区/毎日新聞社提供)



マイBOOK マイPR

『古典に学ぶ現代世界』

滝田 洋一（日本経済新聞社出身）

『自分強制』の産物ご笑覧を

フランス文学者の鹿島茂さんによると、古典に親しむ秘訣は「自分強制」だという。毎月配本される日本文学全集の読破がそのきっかけだった。かくいう私が積ん読の山に手を伸ばすことになったのは、編集者との雑談から始まった「日経BOOKプラス」への毎月の連載。いざ読みだすと現在進行形のストーリーがてんこ盛りなのである。コラムを付して一冊にまとめたが、うなぎ屋の煙のように古典の香ばしさを少しでも伝えられたらうれしい限り。



日経BP 日本経済新聞出版
1,210円

『奇才・勝田重太郎の生涯 近代日本のメディアを駆け抜けた男』

千野 境子（産経新聞社出身）

忘れられた奇才を発掘

奇才の名付け親は勝田が終生、師と仰いだ國民新聞主筆の徳富蘇峰です。蒙古王を夢見て信州を出奔、朝鮮・京城日報受付け係を振り出しに、新聞は新愛知（中日新聞の前身）東京

支社長、國民新聞代表取締役、名古屋タイムズ社長、信濃毎日新聞副社長、産経新聞東京本社社長として腕を振るい、放送は信越放送社長。弘報堂、レイト化粧品、科学主義工業社、東宝映画でも助っ人として活躍。

勝田の足跡を辿れば近代日本のメディアの興亡が垣間見えます。



論創社
3,080円

『漫画 いしづみ 原爆が落ちてくるとき、ぼくらは空を見ていた』

佐藤 宏（広島テレビ放送取締役東京支社長）

語り継ぐための、新たなかたち

原爆で命を奪われた広島二中1年生323人の記録を描いた『いしづみ』が、被爆80年の2025年に初のコミック化。サメマチオ氏による繊細な作画と、時代考証に基づいた表現で、被爆の実相を「絵と文字」で次世代に語りかける。1969年のテレビ番組から始まり、書籍、映画と形を変えて継承されてきた命の記録。被爆者の高齢化が進む中、過去の記録を今に届け直す新たな試みとして、平和の継承に大きな意味を持つ一冊。



ポプラ社
1,650円

記者研修会開催のお知らせ

現役記者対象の記者研修会を8月28日、29日に対面とオンライン併用で開催します。申し込み締め切りは8月21日正午。下記のQRコードからご登録ください。



【問い合わせ先】

日本記者クラブ事務局（浅田、村上、近藤）、電話：03-3503-3766、メール：kaiken@jnc.or.jp

【プログラム】

■8月28日（木）

①オープンデータ活用術

熊田安伸 スローニュースシニアコンテンツプロデューサー
『記者のためのオープンデータ活用ハンドブック』改訂版を昨秋、刊行。著書にも掲載していない新たな情報収集術と活用事例を紹介します。

②記者「基本のキ」

第1部 奥山俊宏 上智大学教授、澤康臣 早稲田大学教授
「なぜ実名を報道するのか」「中立は正しいのか」。記者が心得ておくべき「基本のキ」を伺います。

第2部 グループ討論

参加者から事前にいただいた取材上の悩みをグループで議論、発表し、奥山さん、澤さんからもフィードバックをいただきます。

※名刺交換会・交流会

■8月29日（金）

③ハンズオン講座…きょうからできるデータ報道

西山諒 産経新聞社編集局メディア編成本部デジタル企画部記者
エクセルを使いオープンデータなどを分析します。

④オンラインによる記者への誹謗中傷 対処法を考える

田中志織 朝日新聞社ソーシャルメディアディレクター、松井豊 筑波大学名誉教授
SNSなどでの記者への誹謗中傷、プライバシーを侵害するような投稿の事例について、田中さんが対応や課題を紹介。ジャーナリストへのオンライン・ハラスメントの実態の調査結果などを基に、松井さんとストレスケアについて考えます。

⑤参院選ファクトチェック実践報告から報道機関の役割を考える

奥村信幸 武蔵大学教授、ファクトチェック・イニシアチブ理事、仲村和代 朝日新聞社ファクトチェック編集部編集長、安藤文暁 神戸新聞社報道部デスク、高田圭太 フジテレビジョン政治部長
参院選報道におけるファクトチェックの取り組みについて3社が報告します。

■会議報告

●第465回会報委員会

(7・7 会見場)

初参加の佐藤圭一委員(日本テレビ放送網報道局長)と堀口由多可委員(日本民間放送連盟役員室長)があいさつしたあと、8月号の編集について協議した。

出席 榊原委員長、田中、森、高橋、成田、佐藤、堀口、鴨下、辻の各委員。

●第575回会員資格委員会

(7・10 会見場)

8月1日付入退会を審議、理事会に答申した。

出席 福島委員長、佐々木、山本、松永、中村、武井の各委員。

●第249回施設運営委員会

(7・15 小会議室)

2024年度と25年度4月から6月の事業収益について事務局が報告した。排水管工事に伴い、お盆期間を含む8月9日から17日まで、クラブの施設を閉室することを決めた。

レストラン・アラスカから、10階ホールをアラスカの貸し切りパーティーに利用したいとの申し入れを受けた件について事務局が説明。記者会見などに影響しない範囲で、特例として申し入れを受ける方針を了承した。

出席 塚越委員長、阿部、柳井、辻、高木の各委員。

●第563回企画委員会

(7・16 10階ホール&オンライン)

初参加の吉村英輝・産経新聞社東京編集局総務、新任の藤川みな代・テレビ朝日報道局コメンテーター室長(旧松木真也氏)があいさつした。7月2日の参院選党首討論会を振り返り、今後の運営について協議した。ゲスト候補についても意見交換した。

出席 菅野委員長、伊藤、行方、佐藤、澤田、橋本、猪熊、大内、奥村、高橋、辻本、乾、森田、吉村、内田、小林、中村、白石、早川、森、宮内、今井、出川、山下、萩原、藤川、立石、石原、尾崎、滝の各委員。

〈法人代表変更〉

- ・日刊工業新聞社 神阪拓 代表取締役社長(旧井水治博氏)
- ・テレビ朝日 西新代表取締役社長(旧篠塚浩氏)
- ・テレビ東京 吉次弘志 代表取締役社長(旧石川一郎氏)
- ・毎日放送 永井達也 東京支社長(旧緒方義弘氏)
- ・関西テレビ放送 岡宏幸 代表取締役社長(旧福井澄郎氏)
- ・中京テレビ放送 黒崎太郎 代表取締役社長(旧伊豫田祐司氏)
- ・日本国際放送 前田浩志 代表取締役社長(旧高尾潤氏)



女子大で教えるようになって2年半がたつ。今時の女子大生がよく口にするのは「ヤバイ」という言葉だ。最初は「何かまずいことが起きたのか」と思ったが、そうではない。彼女たちにとって「ヤバイ」は「すごい」「最高」を意味する。さらに驚かされたのは、同じ意味で「テバク」という韓国語のスラングが日常的に使われていることだ。「大当たり」「大儲け」というニュアンスもあり、かなりくだけた表現と言える。

K-POP人気の高まりにより、韓国語に親しむ若者が増えている。推し活のため、韓国や日本以外の国でもコンサートに行った、早朝から収録現場で待ち受けた、そのエネルギーには圧倒される。翻訳アプリを使えば、推しともファン同士でも簡単にコミュニケーションを取ることができる。以前は考えられなかった形で顔の見える交流が手軽にできる時代になったのは大きなメリットだろう。

昨年12月、当時の尹錫悦大統領

「ヤバイ」と「テバク」

は「非常戒厳」を宣布し、軍部隊に国会を占拠させようと試みた。韓国国民の多くが戒厳阻止のため国会周辺に集まり、軍に対峙したのは記憶に新しい。20〜30代の若い女性たちがK-POPを歌い、ペンライトを手に抗議デモに集まった。この状況を受けて「韓国はどうなってしまうのか?」と、教え子たちの関心も一気に高まった。ユーチューブを通じて情報収集する学生も多かった。問題はその内容だ。

「(当時野党代表だった)李在明氏は北朝鮮や中国と結託している」

「尹大統領は不正選挙のせいで戒厳令を出した」

教え子たちの情報源のほとんどが尹支持派の政治系ユーチューバーだった。偏った情報によって先入観が植えつけられれば、分断や対立が先鋭化しかねない。

日韓関係はこれまでも双方の国民感情によって大きく揺れ動いてきた。それだけに未来の日韓関係を担う若者には、情報を見極める目を磨いてほしい。

フジテレビジョン出身

鴨下 ひろみ

レストラン＊価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 八月お献立 (8/29まで)

先付前菜：ほおずきトマト、鰻寿司、鮭オリ
ーブ漬けなど 馬蹄杯：錦糸うり、海老の吸酢
掛け 冷焼：もろこしすり流し、焼きヤングコ
ーンなど 造り：はた昆布締め、天使の海老
焼き物：夏鴨くわ焼、なすステーキ、彩ピーマ
ン 煮物：鰻けんちん蒸しなど 食事：茶そば
水菓子：葛切り (5,500円) (板長：薫田勝)
※仕入れの都合で内容が変わることがあります。

洋食 季節のおすすめコース (8/30まで)

カジキマグロのタリアート 酢橘のヴィネグレ
ット、冷製クリームコンスープ、牛フィレ肉
のグリル マデイラ酒のソース、トマトのコンポ
ートとバニラアイスクリーム バルサミコソース、
コーヒーまたは紅茶、パンとバター (4,400円)。
ランチ、ディナーともに9階レストランでもご
提供します。 (シェフ：佐藤和治)

「戦後80年を問う」会見動画公開中

戦後日本のあり方を振り返り、今後の針路を問
うシリーズ企画「戦後80年を問う」が好評です。
ウェブサイトで会見動画や会見レポートをご覧い
ただけます。

- ①中満泉さん 国連事務次長 (軍縮担当上級代表)
(1.31)
- ②行天豊雄さん 元大蔵省 (現財務省) 財務官
(2.26)
- ③中村秀一さん 元厚生労働省老健局長 (3.25)
- ④泉徳治さん 元最高裁判事 (4.22)
- ⑤吉野彰さん 旭化成名誉フェロー (4.24)
- ⑥権藤博さん 野球評論家、元横浜ベイスターズ
監督 (5.19)
- ⑦ジェラルド・カーティスさん 米コロンビア大
学名誉教授 (5.22)
- ⑧濱口桂一郎さん 労働政策研究・研修機構 (JIL
PT) 労働政策研究所長 (6.3)
- ⑨但木敬一さん 元検事総長 (6.4)
- ⑩井上亮さん ジャーナリスト (6.17)
- ⑪湯川れい子さん 音楽評論家、作詞家 (6.20)
- ⑫森下洋子さん 松山バレエ団理事長・団長、プ
リマバレリーナ (7.4)
- ⑬池澤夏樹さん 小説家、詩人 (7.16)
- ⑭秦早穂子さん 映画評論家 (7.17)
- ⑮坂東眞理子さん 初代内閣府男女共同参画局長
(7.23) ＊会見レポートのみ掲載
- ⑯茂木友三郎さん キックマン取締役名誉会長
取締役会議長 (7.25)
- ⑰折木良一さん 元統合幕僚長 (7.30)

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン (9階) ☎ 3503-2723 ●会員事務 ☎ 3503-2727
- 洋食レストラン (10階) ☎ 3503-2766 ●経 理 ☎ 3503-2728
- 貸室予約、宴会打ち合わせ ☎ 3503-2724 ●クラブ行事への申し込み ☎ 3503-2722
- 受 付 ☎ 3503-2721 ●会見申し込みアドレス kaiken@jnp.or.jp

会員現況

- 法人会員：121社 ●基本会員：700人 ●個人会員：978人
- 法人・個人賛助会員：53社・112人 ●特別賛助会員：96人
- 名誉・功労会員：12人 ●学生会員：73人 計174社・1,971人



新しい個人D会員



宇佐美 理



1988年日本テレビ放送網入社。警視
庁クラブ、司法記者クラブ、「Oha!
4 ニュースLIVE」プロデューサー、
報道局サイバー戦略部長、DX推進
局サイバーセキュリティ推進事務
局長などを務め、5月退職。

「記者ゼミIT講座」のお手伝いをして
きました。引き続き講座に参加させて
いただきながら、メディアのこれから
を見守っていききたいと思います。



桜井 陽



1997年日本経済新聞入社。西部支
社と東京・大阪本社の社会部記者
として警視庁、大阪府警、福岡県警、
気象庁、国交省などを担当。映像
報道部デスク、NIKKEIリスクリン
グ編集長を務め、6月退社。

いかにして紋切り型ではない豊かな
情報を伝えるか。アメリカで盛んな長
尺のポッドキャストをヒントに、自分
も挑戦していきます。



藪田 正弘



1975年読売テレビ放送入社。報道
部記者 (大阪府警など)、ディレク
ター (NNNドキュメントなど)、報
道局次長などを務め、2013年退社。
13年～18年、BPO (放送倫理・
番組向上機構) 調査役、統括調査役。

神戸市在住のため、会見はリモート
による視聴・参加が主となりますが、
一次情報を得られる貴重な機会を楽し
みにしています。

アラスカ夜の部 半額サービス 8/29まで

8月29日まで会員の皆さんは10階レストラ
ン・アラスカの夜の一般メニューを半額でご利
用いただけます。貸し切り営業、臨時休業の日
もございますので、ご利用の際は事前にアラス
カ (03-3503-2766) にお問い合わせください。

今後の行事予定 (8/1現在)

20㊥	18:00～19:45 10階ホール 試写会「壁の外側と内側 パレスチナ・イスラエル取材記」 昨夏にパレスチナ自治区のヨルダン川西岸に取材に 入った中東ジャーナリストの川上泰徳さんによるドク ュメンタリー映画。
25㊥	15:00～16:30 10階ホール フィリップ・シェトラ＝ジョーンズ 英国王立防衛安 全保障研究所 (RUSI)・インド太平洋プログラム主任 研究員、秋元千明 同日本特別代表、特別名誉フェロー
9月 1㊥	17:30～20:15 10階ホール 試写会「揺さぶられる正義」 弁護士資格を持つ関西テレビ放送記者の上田大輔さ んが「揺さぶられっ子症候群 (SBS)」事件を追ったド キュメンタリー映画。

会報委員会

委員長＝榊原 智
委 員＝飯山 雅史 勝田 洋人 鴨下ひろみ
佐藤 圭一 高橋 清子 田中 成之
辻 篤子 成田 浩二 堀口由多可
森 一徳

(事務局：西村志織 本庄五月)

☎ 03-3503-2729 FAX 03-3503-7271

撮影：井上 容^{いのうえ よう} (日本経済新聞大阪本社ビジュアル報道グループ)



兵役を終えて除隊し、ファンの前に姿を見せた韓国の人気K-POPグループ「BTS (防弾少年団)」のメンバー
＝写真左は6月10日、韓国・春川市。同右は11日、韓国・漣川郡

平和の土壌に戦争の種子

韓国へ出かけるよと話したら、親類の小学6年の女の子に「BTSの写真とグッズ、買ってきてね」と頼まれた。世界的人気の韓国のボーイズ・グループは日本の少女にも愛されている。その彼らにも兵役の義務は容赦なく、全員が服して終えた。朝鮮半島の戦争は終わっていない。

昔、エルサレムにある日本のテレビ局のオフィスを訪ねたら、顔見知りのユダヤ人通訳がオリブ色の軍服を着て肩にアメリカ製自動小銃M16を引っ掛けて出かけるところだった。「どこへ」と聞くと「予備役の訓練です」と休暇旅行にでも行くかのような軽快な声が返ってきた。イスラエルもまた建国来、戦争が続いてきた国である。常備軍にその数倍の予備役兵を加えて戦ってきた。予備役は皆仕事をもつので多数を長期招集すれば国家経済に影響しかなない。短期決戦が好まれ、諜報も磨かれる。(余談ながら自動小銃にM16とわざわざ記したのは、当時銃に付けた弾倉が長方形ならM16をもつイスラエル兵、曲がった扇形なら旧ソ連製カラシニコフAK47をもつパレスチナ・ゲリラと暗闇でも見分けられると教わったため。幸いそんな恐ろしい場面には出くわさなかったけれど)

戦間期というと先の両大戦間の約20年を指すが、戦争のあとほど警戒すべきようである。米国の風刺作家ビアスの警句集『悪魔の辞典』で戦争の項をひくと「平和と言う作為の副産物。政状の最大の脅威とは国際間の友好関係の期間」と説く。さらに「治に居て乱を忘れず」には深い意味がある。平和という土壌には戦争の種子がびっしりとまかれ、そこでは異常なほど発芽生育するという。戦後80年というけれど世界はともてきナ臭い。そう言えばBTSとは防弾少年団の略だとか。戦争の種子を一つでも摘んで戦間期とはならぬように。

(中日新聞社出身 深田 実)